



## 「福音宣教と平和希求」

～神様の愛こそが平和の鍵～

「『…今日、皆さん方をお招きしたのは、お近づきになりたかったからです。また、私が捕らわれの身であるのは、メシヤ(救い主)が来られたと信じているためだと、わかっていただけだったからです。』ユダヤ人たちは答えました。『私たちは、あなたのことは何も聞いていません。…。私たちは、あなたの信じていることを、あなたの口からお聞きしたいのです。クリスチャンについて知っていることと言えば、彼らが至る所で非難の的だということだけなのです。』」 使徒行伝28章20～22節 [リビングバイブル]

「そういうわけだから当然のことながら、カトリック教会やプロテスタント系の教会側からすれば、本書は新しい異端でしかないだろう。だが、異端とはいったい何か。異端とは正統や伝統に沿っていないということだ。言い換えれば、『既存の組織宗教の枠内ではない』という意味しか持っていない。では、正統と自称する組織宗教において、人は実際に救われてきたのか。この2000年の歴史において、平和をつくってきたのか。あるいは、組織宗教はこれまでの戦争や殺戮や暴力を渾身で阻止してきたのか。」(白取春彦著「超訳 イエスの言葉」から)

宗教離れ、キリスト教離れの理由として、「宗教」が「平和」を壊してきたという理由が大きいのだと思います。しかし、白取さんがおっしゃっていることも理解できますが、それは、キリスト教のある一面だけを見ているから偏って見えてしまうということでもあると思います。

パウロ自身も現在のようなキリスト教を作ろうとしたわけではないと思います。もちろんイエス様ご自身も。ただ、既存のユダヤ教を完成するためにイエス様が送られて、その救いによって神様の救いの計画が実現したのだということを理解してもらって、ユダヤ教(このような言い方もしていませんが)の完成形をイエス様を通して私たちにお与えくださったということを語りたかったのだと思います。全世界、全人類を救うための方法として、神様が造られた道、唯一平和の道がこの福音であるということを伝えたかった。

本当の平和とは、人間同士が神様抜きに作り出せるものではなく、神様ご自身がいのちをかけて私たちに提供してくださった福音そのものであるということを人が受け止めるかどうかにかかっています。しかし、どうしても、人は自分たち自身で平和を造り出せると考えてしまいます。国連の事務総長も初めて日本の平和式典に出席されて熱く語っていただきましたが、それは本当に難しいことです。しかし、パウロが必死に敵対していたユダヤ人たちと直接対話をしたように、私たちも直接対話をしていく必要を感じます。そして、正直に自分の足りなさを謝罪し、赦しを求め合う必要を感じます。

ラブソナタ10周年のDVDを観ました。「愛」という理由だけで命を懸けて八先生が始められた働きが未だに全国で継続しています。神様の愛だけが平和の鍵なのだ確信します。